

## 証 言 20

熊本県の菊地恵楓園には北海道出身者も入所されていたが、既に全員亡くなっているため、入所されていた方のうち、一人の女性について、生前の関係者の方々からの証言をいただいた。

### 1 故人の概況

(1) 誕生年月（性別）

昭和4年12月（女性）

(2) 死没年月

平成13年11月

(3) 出身地

空知管内

(4) 入所歴

待労院診療所に入所し、昭和23年11月、菊池恵楓園に移った。

(5) 婚姻

菊池恵楓園に入所されていた方と昭和24年2月4日に結婚。

園には正式な届け出はなかったが2人は夫婦として扱われ、昭和26年に完成した夫婦部屋に入居。

(6) 疾患の状況

病態などからハンセン病ではなかった可能性がある。

### 2 聞き取り結果

(1) 菊池恵楓園の入所者及び職員からの証言

ア 故人の経歴について

故人は親に捨てられた孤児で、最初は函館のトラピスチヌ修道院にいたとの証言があり、その後、4、5歳のときに待労院に行ったようである。

待労院に入所した理由は、本人がまだ幼少であったことから不明であるが、自らの意思によるものではないと推測される。

10代の頃、カトリックの縛りに耐えかねて待労院から何度か逃亡し、昭和23年11月1日に結婚が許されている菊池恵楓園に自主的に入所し、昭和24年2月4日に結婚した。

夫は、活発な人で、パソコンやトランペットなど新しいものに取り組む姿勢を持っていたり、カラオケを趣味としていた。

活発な夫とともに夫婦揃ってワラビ取りに行くなど外出することが多かった。里帰りツアーに参加し、北海道を訪れていた。

夫は平成16年9月死亡し、夫婦ともにクリスチャンとして葬儀を行った。

死亡した際に、夫婦が子供のように可愛がっていた広島在住の知人（親戚ではない。）が、2人の遺品を取りに来た。

イ ハンセン病ではなかったと見られることについて

他の入所者の方から見ると、以下の点からハンセン病ではなかったのではないかと  
の証言があった。

- ・ 指の曲がり方がハンセン病のそれとは異なっていた。
- ・ 顔の引きつりが一部に止まっていた。
- ・ 皮膚の色艶がハンセン病とは異なっていた。
- ・ 知覚麻痺があったことがない。

こうした症状は、むしろ梅毒特有の症状であり、この方はハンセン病ではなく、  
梅毒であった可能性がある。

故人は昭和31年に菌検査を受け、カルテ上はハンセン病の治療を受けていたと  
されているが、これをもって直ちに故人がハンセン病であったと判断するのは他の  
入所者などの証言からも疑わしい。

実際、ハンセン病ではない方の入所は頻繁に行われていた。例えば、村八分に合  
い、行き場所を失って療養所に入ったり、第二次無らい県運動の際には、差別を恐  
れて入所者の妻子までが入所するということがあった。

梅毒は、ハンセン病と外見上似た症状が見られたため、ハンセン病と診断されて  
療養所に入所することもあったとの証言もある。

(2) 待労院の入所者及び職員からの証言

ア 待労院の入所者からの証言

この証言された方は、故人と同じ昭和4年生まれで、昭和23年10月に大分県  
から待労院に入所した。このとき、故人は既に待労院に入所しており、同じ部屋  
(8人部屋)で暮らすことになった。

故人は、自分自身でもハンセン病ではないと言っていたし、見た目も指の曲がり  
方がハンセン病のそれとは違っていた。ハンセン病でないことはみんな知っていた。

故人はとても元気な人だったが、証言者が待労院に入所してから2、3日して待  
労院を出て行った。みんなが寝ている夜のうちに急にいなくなった。

数日しか一緒にいなかったもので、ほとんど何も知らない。あと3年早く来てくれ  
れば故人をよく知っている人たちが生きていたのに、来るのが遅かった。

イ 待労院の職員からの聴取

故人の記録は、昭和38年の火災の際に他の資料とともに焼失し、待労院には何  
も残っていない。昭和38年の火災以降、現に入所している人たちの記録は、記憶  
を辿るなどして復刻したが、昭和38年には故人は既に退所していたので復刻も行  
われていない。

待労院では、昔から入所時にハンセン病の検査を行い、ハンセン病でない患者に  
はハンセン病の治療を行わないので、故人がハンセン病でないことをみんな知っ  
ていたということは、ハンセン病ではなかったと思う。

待労院の入所者は、家族から頼まれて入所を許可する者が多かった。故人はよく  
脱走していたということだが、実際、脱走する患者も多かった。特に、男性に多  
かった。待労院はカトリックなので、結婚を許しておらず、結婚したいと思う患者は、  
菊池恵楓園に移っていった。

## 証 言 21

### 1 証言者の概略

- ・ 誕生年、性別 大正元年（1912）生、男性
- ・ 出身地 上川管内
- ・ 家族 妻、子ども2人
- ・ 証言者 娘
- ・ 現在の療養所 松丘保養園

### 2 経歴等

私は、昭和18年12月生まれで現在66歳になります。

出身は渡島管内です。

私は、中学校を卒業して少し働いた後、17歳の時に結婚しました。

その後、離婚して、平成20年4月に現在の夫と再婚しました。

夫が長島愛生園に入所しているため、私も現在は長島愛生園で生活しております。

私自身はハンセン病には感染せず、隔離もされていませんが、北海道出身の父はハンセン病に罹患したため、松丘保養園に隔離されていたのです。

### 3 家族構成（父、母、兄）

- (1) 父は、大正元年12月に生まれ、平成13年2月に松丘保養園で亡くなりました。満州鉄道で働いていたそうです。
- (2) 母は、生年月日は分かりませんが、父より8歳くらい上だったと思います。終戦後に満州から引き揚げてきて、昭和18年に北海道で私を産みました。平成7年4月に91歳で亡くなりました。行商の仕事をしていました。
- (3) 私には兄もいましたが、詳しいことは知りません。1歳になるかならないかくらいの時に満州で麻疹が原因で亡くなったと母から聞いています（小さい写真だけが残っています。）。

### 4 父が隔離された時の状況

- (1) 私が生まれた時も父はまだ満州にいたのではないかと思います。

父と母がどういう経緯で結婚したのか等は全然知りません。

母は、あまり詳しいことは教えてくれませんでした。

父は、終戦後（あるいは終戦前だったのかもかもしれません）に満州から引き揚げてきて、母や私と暮らすために北海道に来たのだと思います。

私は、父の健康な姿を見たことがありませんでした。

私の物心がついたころには、既に父の目は悪くなっていて（父の症状は、左右眼球委縮、角膜扁平溷濁（こんだく）萎縮というもののようです。）、床に伏せてばかりいたという記憶があります。

私は、父が働いている姿を全然見たことがありませんでした。

母だけが働いていた姿しか記憶にありません。

父の親戚や周りで他にハンセン病の人はいませんでした。全然誰もいませんでした。自宅近辺でもいなかったのではないかと思います（おそらく父と、後述する父と一緒にお召列車で運ばれた女性の方くらいではないかと思います。）。

私は一度母に、兄も実はハンセン病で亡くなったのではないかと聞いたことがありましたが、母はそれは絶対違うとはっきり言いました。

なので、父は満州で働いていた時にハンセン病に罹患したのではないかと思います。

- (2) 昭和26年、私が小学校2年生の時、雪がいっぱいあって寒い時期に父が連れて行かれたという記憶があるので、確か12月だったと思うのですが、白い服を着た人たちが私の小さい家にやって来て、部屋中を消毒して回りました。

私は、まだ小学校2年生だったこともあり、ハンセン病のことなどあまり知らなかったため、何が起こったのか全く分からず、非常に衝撃的でした。

なぜこんなことをするのだろうと思いました。

父が連れていかれるとき、私も連れて行ってと叫んだ記憶があります。

父が連れていかれて収容されたのは、青森県にある松丘保養園というところでした。

- (3) 母と叔父（父の弟）が父に付き添って松丘保養園まで送っていったと聞きました。

父はお召列車というもので運ばれて行ったそうです。

お召列車には、父の他に女性も二人いたそうです。

私は大きくなってから父と一緒にいった女性の方と松丘保養園で会っていますが、この方の症状としては、鼻が少し潰れているくらいでした。

もう一人の方は分かりません。

- (4) 父が使っていた布団とかは全部山に持って行かれてしまい、焼却処分されてしまったそうです。

## 5 松丘保養園での様子

- (1) 私は、父に会いに行くため、父が隔離された翌年の昭和27年頃から毎年、母と一緒に松丘保養園に何度も通いました。多ければ年に3回くらい行っていたと思います。

- (2) もっとも、松丘保養園に行って父に会うことはできても、父と同じ部屋に入ることはできませんでした。

母は、ハンセン病のこととか、伝染することとか、なぜ隔離されているのかとか、何も教えてくれなかったので、なぜ父が松丘保養園に入るようになったのか、なぜたくさんの方が松丘保養園に入っているのか、分かりませんでした。

なので、初めて松丘保養園に行ったとき、なぜこんな怖そうな人たちがばかりいるんだろうと思いました。

それでも、私は、松丘保養園に何度も何度も通っているうちに、なぜハンセン病患者が隔離されるのか、差別されるのかが次第に分かってきました。

けれども、私自身はハンセン病がそんなに怖い病気だとは思いませんでした。小さいころから見過ぎたせいなのか、伝染する病気だとは思わなかったというよりも、そもそもそんなことは考えたことも無かったという方が正確だと思います。

- (3) 松丘保養園では、私がまだ子供だったこともあって、皆が私によくしてくれました。特に、松丘保養園に入所していた北海道出身の方には本当にお世話になりました。この方は、だいぶん前に亡くなったそうです。

この方は、自分の町とは違いましたが、同じ北海道の出身だそうです。この方のお父さんも病気だったということでした。

松丘保養園では、患者の家族が面会に来た時には、通常は面会者宿泊所に泊まることになるのですが（実際、私も何度かは泊まってはいますが、はっきりとは覚えていません。）、私はこの方の夫婦舎に泊めてもらったりするなど、本当に色々お世話になったのです。

父のところに泊まることはできませんでした。

松丘保養園には、患者の家族用の小学校や中学校がありました。皆の公園もありました。

私は、父が収容されてからは学校でいじめられる様になったので、自分も松丘の学校に入りたいとまで思っていました。

## 6 父が隔離されてからの生活

- (1) 父が連れていかれてからは、近所の人たちとの付き合いは無くなりました。

小さい町ですから、噂はあっという間に広がりました。

母は12人兄弟姉妹だったので、親戚も近所にたくさんいたはずですが、父が連れて行かれて以降は付き合いが無くなったのです。

親戚のところに今まで遊びに行っていたのが、急に遊びに行けなくなったのを覚えています。

- (2) 私は、学校では皆にいじめられるようになりました。そのため、学校には行きたくなくなり、学校を欠席するようになり、半分以上とまではいいませんが、かなりの日数を欠席してしまいました。

最初は、ハンセン病のことをよく知らなかったもので、自分が何故いじめられるのか分かりませんでしたし、多分、私をいじめていた子供たちも、ハンセン病のことをそんなに分かっていたわけではなく、親から言われていじめられるようになったのだと思います。

私が中学校に進学してからも、やはり皆にいじめられました。いじめられるので欠席することが多かったですし、そのため新しい友人も出来ませんでした。先生も私をかばってくれるようなことはありませんでした。

- (3) 母は行商をしていました。山菜とかを取って売りに出掛け、それで生計を立てていましたが、売れなかったり、病気で行商に出れなかったりしたらたちまち収入が無くなってしまうので、いつも毎日どうやって食べていくかで苦勞していました。

松丘保養園に父に会いに行くと、父が自分の分の缶詰やチーズ等を取っておいてくれて、それを私達にくれました。

母が私に泣き言を言うことはほとんどありませんでしたが、でも、私が小学生の高学年の頃から中学生のころにかけて、3回ほど、一緒に死のうと言われたことがありました。

経済的な事もあったのかもしれませんが、むしろ私がいじめられるのが嫌で学校に行きたくなくて母の手伝いをしたりしていたことから、母親は私に申し訳なく思っただけのようなことを言ったのかもしれませんが。

もし、母にそう言われたのが、私がもう少し小さい頃だったなら、そのまま母と一緒に死んでいたかもしれませんが。

- (4) 私が大きくなってから気が付いたことですが、母のところには、現金の入った封筒が道庁から定期的に送られてきていた記憶があります。県や市ではなく、道庁からでした。今から思うと、患者の家族に対する特別な手当、生活保護のようなものだったのではないかと思います。

必ず現金封筒で送られて来ていました。母が受領票のようなものを送り返していたような記憶もあります。

また、当時は学校で使う教科書は使い回しが当たり前前の時代だったのですが、私には真新しい教科書が貰えました。道庁からの配慮だったのかどうかはよく分かりません（でも、そのことが理由でまたいじめられました。）。

## 7 結婚後の生活

- (1) 私は、中学を卒業後、少しの間働きに出ましたが、母も年でしたので、母に迷惑をかけたくなかったのですぐに結婚しようと思い、17歳の時に結婚しました。
- (2) 元夫は、渡島管内の出身で建設業の事務や鉱山の事務などいろいろな仕事をしていました。
- (3) 元夫と結婚後は、元夫の仕事の関係で、北海道を離れて岐阜などを転々としたあと、新潟に行きました。

私の母も、岐阜までは私達夫婦と一緒にでしたが、その後母は一旦北海道に戻りました。私達が新潟に引っ越して、離婚した後、再び母に新潟に来てもらいました。

- (4) 私は、結婚後も父に会いに松丘保養園に行っていました。結婚後は母と一緒に行くことは少なくなりました。
- (5) 元夫には、父の病気のことを話した上で結婚しました。隠したりはしませんでした。元夫は、父の病気のことを理解してくれました。結婚するとき、元夫と一緒に松丘保養園に父に会いにも行きました。

このように、父の病気が元夫との結婚の障害になることはありませんでした。

ただ、元夫の家族には、父の病気のことは話しませんでした。

- (6) 元夫は父の病気のことを理解してくれて私と一緒にになったのですが、やはりそのまま問題なく過ごせたわけではありませんでした。

元夫は、酒を飲んだり仕事で嫌な事があつたりしたら愚痴を言うようになったのですが、その時にたとえば自分の出世が遅いのは私の父の病気のせいなどと八つ当たりしては私に暴力をふるったりするようになりました。

- (7) 元夫が松丘保養園に行ったのは結婚する時の一回だけでしたが、私がおの後も頻りに松丘保養園に行くことについて、元夫は特に反対はしませんでした。

元夫に暴力を振るわれるようになり、夫婦仲が悪くなってからは、元夫から松丘保養園に行くなと言われたこともありましたが、それほど強く反対されたわけではあ

りませんでした。私が松丘保養園に行ったら父からお金を貰えたからかもしれせん。

- (8) 元夫との間には子供も二人出来たのですが（昭和37年に長男を、昭和41年に二男を出産しました。）、子供二人も小さいときから松丘保養園に連れて行き、父に会わせています。

子供達には父の病気のことは全く隠したりはしませんでしたし、子供達も父の病気のことを理解してくれました。

- (9) 元夫とは、元夫の暴力が原因で次第に不仲になり、やがて別居状態になりました。そうして、子供二人が成人してから、元夫と正式に離婚しました。

## 8 離婚後の生活

- (1) 元夫と離婚した時、母はまだ元気でした。

私が元夫と別居したり離婚したりしたことは、父にも言いましたが、父の病気が原因だとは言えませんでした。

息子2人は現在新潟に居ます。元夫も新潟に居るようです。

- (2) 離婚して仕事に出るようになって、友達が出来ても、父の病気のことを知ると、友達は離れて行きました。

だから、もし再度結婚するなら、父の病気のことをわざわざ話さなくても済むように、同じ病気の人と結婚したいと思うようになりました。

- (3) 仕事をしていると、自分がハンセン病と関わりがあることを知られるわけにはいかなかったので、仕事を休んで市民学会などに出るというわけにもいきませんでした。

なので、60歳になってからは仕事を辞めて、市民学会などの退所者の会にいろいろ出られるようになりました。

れんげ草の会にも入り、ハンセン病の患者の子供や家族など、同じ境遇の人たちとたくさん会うことが出来ました。

- (4) そうして5年前、富山で行われたハンセン病についての市民学会で、今の夫と知り合いました。

夫は長島愛生園の入所者で、広島県出身、夫の兄も病気（退所している）、母も病気（入所前に亡くなっている）とのことです。

4年前に、私も長島愛生園に来て、平成20年4月1日に正式に入籍しました。

夫は、社会復帰をしてはまた入所してを繰り返していましたが、もう年も年なのでここ長島愛生園で落ち着くことを考えています。

## 9 その他

- (1) 長島愛生園に来て一番感じたことは、お骨を持って里帰りしたいと言う人はたくさんいますし、国もお骨を持って行けと勧めています。私も息子のいる新潟にお骨を持っていき、お墓を作りました。なのに、お骨を故郷に持って帰っても、国の人もある人も、誰もお参りにきませんし、線香の1本すらあげに来たことはありません。

でも、お骨がここ長島に入れられると、県からも市からも頻繁にお参りに来ます。だったら、お骨を故郷に持っていかずに、長島に置いたままの方が良かったんじゃない

ないかとすら思ってしまいます。

私は、このことが本当に納得できません。

- (2) 私が育った時代は一番差別が酷いときだったと思います。

強制隔離された時代の患者やその家族達が、一番ひどい目に遭わされたのです。

強制隔離の時代では無かった頃、隔離されなかった患者は、子供たちにも病気のことを話さずに済ますことが出来ました。

でも、私達の時代は、強制的に隔離されたので、そういうわけにはいかなかったのです。

それでも、患者は隔離されはしたものの、生活は保障されていました。

ところが、患者の家族達は、周囲の差別にさらされ、生活にも困るなど、一番大変な思いをしてきました。

なのに、国は患者の子供や家族に何もしてくれません。

道からも、私に1回も連絡はありません。

私が新潟に居た時も、何も連絡はありませんでした。

父の土地が道路計画に引っかかったとき、開発局から私のところに連絡が来たことがありました。それで、父が松丘保養園に入っていることも伝えました。なので、道も連絡する気があれば開発局と同じように調べて連絡することができたはずなのです。

父が亡くなったときも、松丘保養園から道に連絡は行っているはずです。

道が探しても見つからなかった、探したけど家族の方から連絡を拒否されたというのならともかく、探せるはずなのに、何の連絡も無いのです。

患者は病気でつらかったと思いますが、精神的な苦しみをより負ったのは家族の方です。

患者の家族の精神的苦しみを国はもっと真剣に考えて欲しいと思います。

夫の姉も差別の被害に遭っています。突然家中を消毒され、田舎だったので、それからは皆に差別されて苦しんだようです。

熊本地裁の判決後、患者に対しては少し良くなりましたが、家族に対しては全然何もありません。

- (3) 私は父の病気を知っていましたし、自分の子供たちにも父の病気のことを隠していません。でも、子供達に自分の病気を隠していた人（そういう人はたくさんいるはずですが。）は、亡くなった後子供たちがお参りにも来てくれません。本当にかわいそうです。

- (4) 私はもし再婚していなかったら、子供に頼らなければとても生活していけなかったと思います。

私は、ただでさえ女性な上に、父の病気のこともあって、離婚後も仕事を転々とせざるを得ませんでしたので、厚生年金といっても微々たるものです。とって、父の病気のことがある以上、健常者と再婚なんて出来なかったと思います。

- (5) 父が亡くなったのに、道から線香の一本もあげてもらっていないのが悔しいし悲しいです。

- (6) 父が亡くなってからは一度も松丘保養園には行っていません。